

## 刊行のことば

世界は一刻も休んでいない。しかも、今日は、交通通信の発達により、国境を越えた人、物、金、情報等の流通がますます活発になりつつある。いわゆるグローバリゼーションの流れの中で、世界各国の社会経済は、過去には見られなかったような速さで変化しつつある。農業といえども、その例外ではあり得ない。

日本の農業も、独自の条件をもっているとはいえ、世界の農業とのつながりは、ますます大きくなっている。世界とともに考え、世界とともに伸びるのが、日本農業の今日の使命である。この叢書の目的とするところは、まさにこの使命を忠実に実行するところにある。

## 農村地域経済と新しい内発的発展

### —Centre for Rural Economy の挑戦—

解題/翻訳 安藤 光義

#### 編集委員

安藤 光義	鈴木 宣弘
池上 彰英	立川 雅司
大山 利男	三石 誠司

(五十音順)

解題	2
イングランド北部農村：努力と探求が織りなす景観	7
要約	7
1. はじめに	7
2. 農村地域経済の特徴	9
3. 農村地域発展の概念化	15
4. 新しい内発的な発展	17
5. 知識の普及：大学と農村地域	19
6. 大学と知識移転	21

## 解題

農村地域経済と新しい内発的発展  
—Centre for Rural Economyの挑戦—

安藤 光義

(東京大学大学院農学生命科学研究科准教授)

「農村地域経済 rural economy」と「新しい内発的発展 Neo-endogenous development」の2つが農村地域政策 rural policy にとってのキーワードである。前者は、その意味する内容を的確に表現する日本語が見つからず、本稿では、とりあえず農村地域経済という訳語をあてることにした。

英国ニューカッスル大学の農村地域経済研究センターCentre for Rural Economy (CRE) は、その名前が示す通り、農村地域経済 rural economy という考え方を提起し、その特徴を解明する研究を他に先駆けて推進してきた。また、そうした調査研究に基づいて新しい内発的発展 Neo-endogenous development を提唱し、英国はもとより、EU レベルでの農村地域政策 rural policy の形成に大きな影響を与えてきた。その成果のうちの一部は、既にこの「のびゆく農業」の場を借りて訳者が紹介してきたところである。

ここで紹介する、フィリップ・ロウ教授 Professor Philip Lowe の、「イングランド北部農村：努力と探求が織りなす景観 The Rural North: Landscapes of Endeavour and Enquiry The 2008 Cameron-Gifford Lecture」は、2008 年 4 月にニューカッスル大学で行われた公開講演に基づいて作成された論稿であり（訳者は、このフィリップ・ロウ教授の講演を拝聴する機会に恵まれた）、Centre for Rural Economy Discussion Paper Series No.16 として CRE のホームページ上に公開されている。この論文は、1992 年に設立された CRE のこれまでの研究成果を、初代所長であるフィリッ

プ・ロウ教授—正確には Duke of Northumberland Professor of Rural Economy となるが—自らが振り返って総括を行い、その意義と今後の方向を述べたものであり、CRE の全体像を理解するに際して重要な知見を提供してくれる。

\*\*\*\*\*

「農村地域経済 rural economy」を一言で説明するのはなかなか難しいが、その構成要素である農村地域 rural areas における農業以外の事業や企業の活動に注目した調査研究を積み重ねてきた点に CRE の 1 つの特徴がある。日本でも農村地域における中小零細企業の実態の解明は遅れているのではないだろうか（単に訳者が不勉強なだけという可能性も高い）。最近の政策が強調する「6次産業化」は比較的これに近い考え方のようにみえるが、農業を特別視（神聖視）している点で、農村地域経済 rural economy との間に埋めがたい溝が横たわっているように感じている。そもそも rural という言葉は agriculture を直接的に含意するものではないからである。念のため辞書で rural を引くと connected with or like the countryside (Oxford Advanced Learner's Dictionary) となっており、さらに countryside を引くと land outside towns and cities, with fields, woods, etc.

(同上) となっている。この field に growing crops や keeping animals という意味があるので、ようやく農業との繋がりがみえてくるが、rural から「農」の文字を連想することにはやや難があるというのが率直な感想である。そのため「農」と「経済」との間に距離を設けるために「農村地域経済」という訳語をあてはめた次第である。

この点はともかく、これまで CRE が手掛けてきた農村地域経済に関する研究は、逆都市化 counter-urbanisation が農村地域社会にインパクトを与えていること、都市からの移住者が新規事業開業の源泉となっている

こと、自営業世帯・家族経営は外部からのショックを吸収・緩和する弾力性・強靱性を有していること、農村 rural area は閉じた存在ではないこと、地元社会への過度の埋め込みはかえって経済的な活力を奪ってしまうこと、などを明らかにしてきた。

\*\*\*\*\*

「新しい内発的発展 Neo-endogenous development」という考え方は、こうした農村地域経済に対する認識に基づいて提唱されたものである。これはフィリップ・ロウ教授の論稿に従えば次のようになる。

私たちは、経済、文化あるいは政府など外部からの影響力を全く排除した自律的な社会経済的発展を目指す地域 localities といった考え方は非現実的であり、グローバル化する世界の中で実用的な提案とはいえないとする論陣を張ってきた。いかなる地域 locality も、その社会的経済的発展のプロセスは地元と外部の双方の力の混合 mix of local and external forces の結果ではないだろうか。重要なのは、内発的発展、外発的発展の双方をバランスよくコントロールすることであり、この大きなプロセスと具体的な行動を自分たちのために操ることができるように地域 local areas と地元の主体 local agents の能力の強化を図ることである。これが私たちのいう「新しい内発的発展 Neo-endogenous development」のコンセプトである。

キーワードは「地元と外部の双方の力の混合」にある。外発的発展は発想自体に問題があるが、それに代わって登場した内発的発展も偏狭な地元礼賛主義に陥ってしまっただけで成功を納めることはできないというのが新しい内発的発展のポイントである。その限りでは「よそのもの」に注目する日本の中山間地域政策と重なり合っていると見てよいかもしれない。

しかしながら、フィリップ・ロウ教授はここで歩みを止めることなく、外発的発展の背後にある「知識移転単線モデル」という考え方の批判からさらに踏み込んで、「象牙の塔」の高みから「専門家」として「素人」に知識を授ける存在であった大学の役割を問い直し、知識とは何か、それはどのように生まれ、広まるのかという問題にまで議論の幅を広げていく。

\*\*\*\*\*

この課題に応えるべく、CRE はイングランド北部での農村地域発展 rural development の実践に深く関与し、現場ととの間の相互学習を図るために現在は1,000人以上の会員を擁する Northern Rural Network を立ち上げ、調査研究を積み重ねてきた。それは「理念と行動との乖離」を避けるための取り組みでもあった。そして、こうした現場をもっていることが CRE の研究の強みとなって遺憾なく発揮された結果、2,500万ポンド（30億円）という莫大な予算の研究 Rural Economy and Land Use (Relu) の「司令塔」に CRE は指定され、フィリップ・ロウ教授はこの「指揮官」に就任することになったのである。

Relu の特徴である学際的研究は、自然科学と社会科学との障壁はもちろん、専門家とそうでない人々との間にある障壁も取り払い、互いにフラットな立場からの積極的な対話を行うなかで新しい知識を創造していく点に特徴がある。専門家ではない人々も専門家に勝るとも劣らない「現場の知識」とも呼べる知識を備えており、研究者の側からもそこから学べることは少なくないはずだというのが Relu の姿勢である。まさに知識は、一方から一方へと伝達され、移転されるものではなく、「双方向」で交換されるものなのである。

現場に根差した CRE の農村地域経済 rural economy に関する調査研究は、「新しい内発的発展 Neo-endogenous development」という考え方に結